

ウツギ

宮内 泰之(人間社会学部人間環境学科)

Deutzia crenata

MIYAUCHI Yasuyuki

1. はじめに

ウツギ (*Deutzia crenata*) はユキノシタ科に分類される落葉低木である。ただし、近年では分子系統学的研究によりユキノシタ科とは縁遠いことがわかり、アジサイ科に分類されるため、本項でもこれにならうこととする。北海道南部から九州までのほぼ日本全国に自生するほか、中国にも分布している。林縁や山野の路傍、川沿いなど明るいところを好み、初夏には白色の花が野山のあちこちに見られる。名前の由来は枝が中空であることからウツギ(空木)である。また、旧暦四月の卯月に花が咲くことから、ウノハナ(卯の花)という別名も広く親



ウツギ(*Deutzia crenata*)

しまれている。ただし、ウツギバナから転じてウノハナとなり、卯の花の咲く時期だから卯月となった、という説もある。いずれにせよ、ウツギの花と田植えの始まる時期が重なることから、日本では昔から農耕に密着した身近な植物であった。

ウツギの品種としては、八重の白花品であるシロバナヤエウツギ (f. *candidissima*)、八重で花卉の外側が紫紅色のサラサウツギ (f. *plena*) などがある。同じウツギ属にはマルバウツギ (*D. scabra*)、ヒメウツギ (*D. gracilis*) などがある。いずれの種類も枝が四方に暴れて伸びるので、近年では庭木として

あまり好まれないようである。しかし、実生、挿し木いずれも簡単に増やすことができ、性質も強健なので栽培は容易である。強剪定にも耐えるので、徒長枝は切り戻し、古い枝は地際から取り去って枝の更新を図るとよい。花芽の多くは前年に伸びた枝の側芽から伸びる新梢につくので、花を楽しむためには全面を刈込むのではなく枝抜き剪定を行う必要がある。

2. さまざまなウツギ

和名の一部に‘ウツギ’を含む樹木は科をまたいでいくつかあり、これが混乱のもととなっている場合がみうけられる。その代表はスイカズラ科のタニウツギ属(*Weigela*)であろう。タニウツギ(谷空木、*Weigela hortensis*)の園芸品種と思われるベニウツギなどが、園芸店でアジサイ科のウツギと一緒に同じウツギの仲間として売られていることがある。アジサイ科のウツギ属は花卉が一枚一枚ばらばらになっており(離弁花)、スイカズラ科のタニウツギ属はラッパのように花卉が筒状にくっついている(合弁花)ことから、花を見ればこれらを混同するおそれはない。また、丸いウツギ属の果実と、細長いタニウツギ属の果実はいずれも果期が過ぎても枝にくっついて残っているので、これも判断材料になる。問題は花も果実もついていない場合である。いずれも対生葉序(二枚の葉が一ヶ所で対になってついていること)であるため一見似ているが、ウツギ属の葉は卵形で表面がざらつくこと、タニウツギ属の葉は楕円形で柔らかい毛が生えているがあまりざらつかないことなどから区別することができる。また、漢字では谷空木と書くものの、タニウツギ属は枝が中空ではない。

この他にも、バラ科のコゴメウツギ(小米空木、*Stephanandra incisa*)、ドクウツギ科のドクウツギ(毒空木、*Coriaria japonica*)、ミツバウツギ科のミツバウツギ(三葉空木、*Staphylea bumalda*)、フジウツギ科のフジウツギ(藤空木、*Buddleja japonica*)などがある。紛らわしい名前の付け方をしたと思われるかもしれないが、これらの樹木はいずれもアジサイ科のウツギと同様に落葉低木で、地際から叢生して株立ちとなり、コゴメウツギの葉序が互生(枝の左右交互に一枚の葉がついていること)である以外はみな対生である。また、いずれも明るい林縁や路傍などでよく見られることから生態的にもウツギ

に似た樹木と捉えられ、小米のような小さな花をつける空木、毒のある空木、葉が三枚に分かれる(三出複葉)空木、藤のような花を付ける空木という意味の名前がそれぞれつけられたのであろう。幸いなことに、これらの樹木は葉や枝に特徴があるので、ウツギと見間違える心配はない。

3. 日本でのウツギの利用

既に述べたように、日本では田植えの目安としてウツギの花が古くから注目されており、野山に自生しているだけでなく、集落や耕作地の周りに植えられていたことが推測される。近年では庭木として馴染みの薄くなってしまったウツギであるが、古くをたどれば日本で生垣として最初に使われた樹木といってもよいであろう。万葉集にはウツギが詠まれている歌は24種ある。その多くはホトトギスと共に野山に初夏が到来したことを示すものであるが、2種については生垣として植えられている情景が描写されている。したがって、万葉人にとってウツギは生垣や庭木というよりも野山の植物という扱いのようであるが、すくなくともこの頃既にウツギの生垣が成立していたことがわかる。飛田(2002)によると、ウツギ以外の樹種を用いた生垣については、他に史料を見つけ出すことができない、とあることから、ウツギが日本の生垣の起源といってもいいのかもしれない。

平安時代になると、生垣のウツギを詠んだ歌が多くなるそうである。物語においても、例えば源氏物語では六条院の夏の庭には「卯の花咲くべき垣根」があり、枕草子にはウツギの垣根の描写が度々登場する。貴族の邸宅内にもウツギが庭木として植えられていたのであろう。さらに、枕草子の222段では、「うつぎ垣根といふものの、いとあらあらしくおどろおどろしげに、さし出でたる枝どもなどおほかるに」、とあるように、枝が暴れて伸びている状態を好ましく思っていない様子までもうかがわれる。

このように、奈良時代までは山の植物としての印象が強かったウツギであるが、平安時代には本格的に庭に取り込まれていくようになる。このような時代によるウツギの扱いの変化は、サクラと通じるものがある。つまり、隋、唐等の大陸文化の影響を色濃く受けていた奈良時代から国風文化が花開く平安時代にかけて、少なくとも当時の日本の貴族の間では、大陸起源のウメ

から日本自生のヤマザクラがより好まれるようになる。ヤマザクラと同じように野山に咲くウツギの花も、このような世の中の流行の変化の中で再評価されていったのではないだろうか。

その後もウツギは稲作と共に人々に身近な植物であり続けたが、今日においてウツギの生垣を目にするのは稀になってしまった。その要因の一つには、既に清少納言が枕草子の中で指摘したように乱れてしまう樹形にあるのであろう。樹形を整えるために刈込んでしまえば、花つきが悪くなってしまい、ウツギの最大の魅力が失われてしまう。もう一つの要因としては、我々の生活が農耕から離れてしまったことにあるのではないだろうか。明治になって暦が新暦に変更され、第二次大戦後は高度経済成長の影で国内の農業が衰退していった。卯月と季節のつながりがわかりにくくなり、田植えを知らせるというウツギの花の役目も、既に過去のものとなってしまったのかもしれない。そういえば、'卯の花の匂う垣根に〜'で始まる「夏は来ぬ」の歌も近頃ではあまり聞かれなくなってしまったようである。

4. ヨーロッパでのウツギの品種改良

ウツギ属の植物は約50種あり、そのほとんどが東アジアに分布している。属名のDeutzia(ドイツア)は、スウェーデンの植物学者カール・ツンベリー(Carl Thunberg)が『日本植物誌(1784)』で、オランダ人の友人ドイツ(Deutz)の名にちなんでつけたものである。また、ドイツの医師および博物学者であるシーボルト(Siebold)は『日本植物誌(1835)』の中で、ウツギ、ヒメウツギ、マルバウツギを記載している。スコットランド出身の植物学者ロバート・フォーチュン(Roberu Fortune)は、1842年にイギリスから中国へ派遣された際にイギリスへ多くの植物を送ったが、その中にマルバウツギが含まれていた。この頃までにイギリスではウツギ類が庭園に使われるようになっていたようである。その後、1897年にフランス人宣教師のP. P. G. Fargesが中国からフランスの種苗会社Vilmorinへ*D. vilmorinae*を、20世紀初頭にアメリカの植物学者E. H. Wilsonがやはり中国からアメリカハーバード大学のArnold Arboretumへ*D. longifolia*、*D. wilsonii*等を送った。園芸品種の作出はこの頃より盛んとなる。その第一人者はフランスの園芸家ヴィクトル・ルモアヌ

(Victor Lemoine、1823-1911)であろう。ルモアーンは、フランスのNancyに小さな園芸店と圃場を設け、そこで、ウツギだけでなく、ペゴニア、シモツケ、アジサイ等の品種改良を行った。ウツギの品種改良については晩年に行ったようである。代表的な品種としては、ヒメウツギと*D. parviflora*との交雑からなる*D. × lemoinei*や、やはりヒメウツギと*D. purpurascens*との交雑からなる*D. × rosea*等がある。

今日、日本でよく見られるウツギ類の園芸品種には、*D. × elegantissima* ‘Rosalind’がある。これは、1950年代にアイルランドのDonard Nurseryで*D. purpurascens*と*D. sieboldiana*をかけ合せて作られたものである。品種名のRosalindは作出者Leslie Slingerの娘の名前だそうである。

5. バイカウツギ

ウツギと同じアジサイ科にバイカウツギ(梅花空木、*Philadelphus satsumi*)という落葉低木がある。ウツギと同じく白花を初夏につけるが、ウツギが5枚の花弁であるのに対しバイカウツギは4枚の花弁であることから、後者はバイカウツギ属に分類される。ウツギの花弁が細長い楕円形でやや閉じ気味であるのに対して、バイカウツギの花弁は幅広の卵形で開き気味に咲く様子から、ウメの花になぞらえてバイカウツギと呼ばれるようになったのであろう。別名はサツマウツギであるが、これまでに鹿児島では確認されていないのは皮肉な話である。

先にも述べたように、近年ではウツギが庭木としてあまりはやらないのに対して、バイカウツギは鉢植えや庭木、公園樹として人気がある。もっとも、近年はやっているもののほとんどは日本に自生のもではなく、セイヨウバイカウツギとして扱われているものが多い。セイヨウバイカウツギと呼ばれているものは、南欧原産の*P. coronarius*や北米原産の*P. inodorus*、*P. microphyllus*、そしてそれらの交雑種などから構成されている。いずれも日本原産のものよりも花が大きく、香りもやや強いようである。北村(1979)によると、「ヨーロッパの*P. coronarius*は16世紀から南ヨーロッパに栽培されていたものであるが、原産地は不明である。Maximowiczは日本のバイカウツギが輸入されたものと考えたが、この説が正しいと思う」とある。この説に従

えば、セイヨウバイカウツギは逆輸入という形で日本に戻ってきたということになる。いずれにせよ、地植えにした場合にはウツギと同様に枝が四方に伸びて樹形が乱れるため、注意が必要である。

花が見栄えのするセイヨウバイカウツギもよいが、小振りの花を樹全体にちりばめたバイカウツギの清楚な姿は、上品さという点ではひけをとらないであろう。セイヨウバイカウツギしか見たことのない方は、初夏の山中に野生のバイカウツギの花を探しに行くことをおすすめしたい。ただし、花つきのよい株を見かけることは稀である。山中で見つけることが難しい場合には、恵泉の教育農場にも植えてあるので、それをご覧いただきたい。8年ほど前、丹沢で採取した種を実生から育てたものである。

参考文献

- 林弥栄. ウツギ、バイカウツギ、フルール、講談社園芸大百科事典 3、60-61、講談社、1980
- 飛田範夫. 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会. 2002.
- 池田亀鑑. 枕草子. 岩波書店. 1962.
- John Dunbar. New Deutzia Better Than the Old. The Gardening Magazine. 228pp. 1917.
- 木村陽二郎・大場秀章. シーボルト「フローラ・ヤポニカ」日本植物誌. 八坂書房. 2000.
- 北村四郎・村田源. 原色日本植物図鑑. 木本編Ⅱ. 保育社. 1979.
- 佐々木信綱. 新訓万葉集(上巻, 下巻). 岩波書店. 1954.
- 佐竹義輔ほか. 日本の野生植物. 木本Ⅰ. 平凡社. 1989.
- トニー・ロードほか. フローラ、産調出版、1024-1025、2005
- 山田宗睦. 花の文化史. 読売新聞社. 1977.
- 山岸徳平. 源氏物語(二). 岩波書店. 1965.